

## 新宗教調査報告Ⅲ (新宗教研究プロジェクト)

### 念法真教

調査スタッフは、大阪市鶴見区内の一角に広大な敷地を有する念法真教ねんぽうしんきやう総本山金剛寺を訪れた。一步境内に足を踏み入れると、伽藍の一部は工事中であったが、広大な敷地の中の静寂が、外界の喧騒を打ち消しているのは、驚きであった。既に完成している諸堂は、柱の朱・壁の白・瓦の黒が奈良・平安朝期の大寺院の伽藍を思わせた。諸堂には六角堂あり、正面から見れば、宇治の平等院の如き左右対称の拝殿等々があった。

然乍ら、建築デザインは古代ばかりを追及しているのではない。拝殿と本殿(九角如来堂)は個別の建物であるが、両者の正面は、無反射ガラスが使用されていた。従来の拝殿と本殿は、屋内・屋外の関係が曖昧である。新素材とそれを生かすデザインを採用したことにより、礼拝時の気分は従前のまま、効果は屋内にすることに成功している。すなわち、空調・照明・音響等に様々な工夫が可能となったことであろう。

さて、本報告は大阪市内の念法真教本部を訪問調査した結果である。管見の限りではあるが、刊行物等により基礎資料を作成し、それに基づき質問項目をまとめ、念法真教本部にて、教務総長長谷川霊信氏より頂戴した解答等を整理したものである。また、訪問した折りには、総本山のパンフレットを頂いた。

さらに、基礎資料作成に当たっては、現宗研嘱託鳥取市学成寺の都龍張師の資料、並に報告書に負うところ多大であったことを、甚々の謝意を表し、附記しておく。

\*調査日 平成三年四月二十五日

\*場 所 大阪市鶴見区緑三丁目四の二十二 総本山小倉山金剛寺

## 一、沿革

### 1 創立者

創立者である初代灯主(ましょ)(信者からは親先生と呼ばれている)・小倉靈現(庄太郎)は明治十九年九月九日、大阪市城東区に生れる。十一歳のとき大阪市内の鍛冶屋に奉公する。その後、乾物屋・船員見習い・砲兵工廠臨時工員などを勤めた。明治三十九年の徴兵検査では、甲種合格となる。在営中の教官吉田豊彦氏の精神講話を聞き、精神界に対する関心が高まった。その後、結婚・第一次世界大戦・息子の死亡など色々な人生の経験を重ねた。大正十四年八月三日、阿弥陀如来が応現し啓示を受け、以後宗教活動に明け暮れることになる。そして、昭和五十七年、九十七歳で死去する。

初代灯主は、生前常に戦闘帽をかぶり、常に苦しい時代を忘れないように戒めとしていた。そして、周囲の人達に「うちは病氣直しの宗教ではなく、楽しい相談所である」と口癖のように語っていたそうである。

なお、現在の灯主は初代の子、二代目小倉靈現(良現)が継いでいる。

さて、念法真教は草創期に、天台宗の傘下に入っていたことから、天台宗との関係を質問したところ、戦時中の国策に従ったまでのことで、特に関係はないとのことであった。昭和二十二年、吉野修験道が離脱したとき、同時に離脱し、天台宗離脱グループ(伝教連盟)として、付き合う程度だそうである。

### 2 成立沿革

明治十九年九月九日(一八八六) 小倉靈現(庄太郎) 大阪府大阪市城東区に生れる。

大正十四年八月三日(一九二五) 阿弥陀如来より啓示を受ける。翌日より宗教活動を開始する。

昭和三年 神仏真靈感応会を結成し、本格的布教を始め、名を小倉霊現とす。

昭和十四年 神仏真靈感応会を天台宗金剛教会と改称し、天台宗の傘下に入る。

昭和二十二年 天台宗金剛教会を小倉山金剛寺と改称す。

昭和二十七年 小倉山金剛寺を念法真教と改称す。九月九日宗教法人として設立登記をす。

昭和四十九年 小倉霊現、天台宗大僧正を贈られる。

昭和五十七年 初代小倉霊現、九十七歳にて遷化す。灯主は二代小倉霊現が継いで現在に至る。

### 3 教勢

信者数 約八〇万七〇〇〇人

教師 五五七〇人

寺院 四十五

教会 三十二

布教所 十五

(文化庁編 平成二年度『宗教年鑑』より)

## 二、教義

### 1 おしえ

念法真教は、「住みよい世の中をつくり、日々楽しい暮しができるように相談するところであり、また、そうした目的に協力する人達(仲間)の集まり(団体)です。世界はひとつであり、すべての人が人としての使命を知り、仲よくすべきであることを知らせるために、念法真教には仏さまが応現おれます。各人の宗教、国境や民族意識にとらわ

れることなく、世界中の人がみんな友達となって手をつなぎ、争いのない拌みあいの世界をつくるのが、念法真教の目的です」(本山パンフレットより)と、その目的とするところを、述べている。

その念法真教の教義は、阿弥陀如来の救いを現世に現わして、この地上に極楽を創る。すなわち、浄仏国土顕現のために、「五聖訓」(註1)を守り、「九誓願」(註2)を立て日常生活の中で、実践することである。そこで、信徒の為には、因縁転生(いんねんきりかえ)と称して、精神的な教えである「五聖訓」の遵守・行事への参加・布施行・念法真教への奉仕活動等が、仏国土顕現につながることでであると説く。これを善因楽果の因縁転生と言う。ここで説かれる仏国土は、仏の境界である。十界の中、四聖六道の四聖が念法信者の世界であり、六道が未信者の世界である。四聖は五聖訓の実践具合により、それぞれの位階に止まるとする。

さらに付加えれば、念法信者は単なる四聖に住する者ではなく、還相回向の行者であるとする。周知のように、一旦浄土に往生するも、浄土に留まることなく衆生済度の為、六道で救済活動をする者を還相回向の行者と呼ぶ。これは、浄土真宗の祖、親鸞の思想である。

崇拜の対象についても、久遠実成の阿弥陀如来は親鸞の和讃の中で「久遠実成の阿弥陀仏」の用例があり、意識の有る無しに関わらず、親鸞の思想に近似していると言える。

ところが、親鸞との決定的な相違は、念法真教が自力の教えである点にある。祈禱会(教団は護摩による祈禱等を親鸞の『現世利益和讃』を根拠にしていると説明していた)・「五聖訓」の遵守などは、全てを阿弥陀仏に任せざる絶対他力とは、程遠いものである。思うに、崇拜の対象を阿弥陀仏としたことにより、浄土教系の教えを、ある程度踏まえなければならず、また、現実社会への働きかけを捨てきれないところに、教義の概要を定めきれない理由があるろう。また、「教祖の言葉があり、教義ができ、經典が選ばれた」と長谷川氏が語られたことは、教理の整束の困難さを意味しているのであろう。

## 2 経典

『五聖訓』『念法法語集』『浄土三部経』

## 3 出版物

『念法真教教義綱要』『念法法語集』『鶯乃声』（月間）「念法時報」（旬刊）

## 三、崇拝の対象

本尊は久遠実成の阿弥陀如来と天之御中主大神（あめのみなかめしのおおがみ）である。両者の関係については、詳しい説明がなされなかった。話の印象としては、天之御中主大神はひとまず擱かれて、専ら阿弥陀仏を礼拝しているように感じた。阿弥陀仏も、念法真教で依用する「浄土三部経」は「法華経」で開会した経であるから、久遠実成の仏となるそうである。

## 四、組織

### 1 本部

大阪市鶴見区緑に、総本山小倉山金剛寺を置く。ここに、拝殿・開山堂・祈願本堂・九角如来堂・六角護摩堂・その他諸堂が立つ。本部「本山」と支部「支院」の関係は、本部中心主義であり、支部が集まって本部ができたのではなく、本部という台があって、支部が生れるとする。本部内には、企画運営・広報などの役職がある。しかし、本部内の組織は、歴史が浅く未整備の状態なので、今後、充実を計ることであった。

### 2 支部

支部の住職は教区長であり、その下に補佐する役員がいる。信徒は班構成されており、それとは別に、青年部の集

まりもあるようである。しかし、組織構成は本部同様、未整備のようである。

本山中心主義については、先に述べたが、本山よりの辞令一つで住職の交代を行なう様である。住職に支部の私物化の意識が起きないように、転勤もよくあり、世襲はできないようである。また、住職と信者に馴合の関係ができぬよう、信者から住職への布施は禁止している。

### 3 その他

入信時には、授戒の儀式がある。帰依三宝戒と五聖訓が授けられる。初代の頃は、年に六回、三、四百人が受戒したが、現在は条件も厳しく、年二回、四、五百人と少数にしている。不思議なことであるが、出家者と一般信者との間に、授ける戒の区別はないそうである。ただ、出家者は修道生として二年の教育を経て戒を受けるようである。

## 五、財政

信行活動の経費を「教費」（含定期刊行物の費用）と称し、それは月額一人二百円である。あとは、志の「布施」「御灯明料」、必要に応じての「寄付」などがある。その他、収益事業はしていない。すべての収入は、一旦本山に納まり、支院の運営経費は本山より支出される。

## 六、布教・教化・社会活動

### 1 教化活動

法座・座談会

念法社会学級

役職者研修大会（支院リーダー研修会）

念法社会学級講師の研修

ご灯主様を囲む教えの勉強会

御詠歌の研修

## 2 布教活動

新宗教の常として、未信徒への布教は、信徒自身の努力に委ねる傾向がある。それとは別に、ラジオ放送を通じて全国的に、布教をしている。

## 3 社会活動

念法真教では、「同和問題」「北方領土返還問題」「コミック誌問題」に社会的発言をし、運動を展開している。これらの活動の根底には、初代灯主の国家に対する思い入れが反映されている。初代の持つ愛国心・倫理道徳に対する啓蒙の志が、出発点となっている。

念法社会学級において、教科書裁判で著名となった『新編日本史』を学習する理由も、歴史観があるのではなく、真実の歴史を知りたいからだそうである。

## 七、体験事例

### 1 神秘主義について

初代灯主の阿弥陀如来による啓示は、他人の心を見通したり、病気を当てるといった超能力を授け、さらに、「念法霊現 念力不可思議 感応神通」の真言を与えた。この真言は唱えれば、願が成就するそうである。このような出発点を持つ宗派であるのに、超常現象や神秘主義については、語られていない。初代灯主自身「うちの宗教は病氣治しじゃない。楽しい相談所である」とよく語っていたそうである。

現在でも、靈驗を否定するわけではないが、売り物にはしないそうである。なぜなら、それは一時的に棄にするだけで、治す訳ではないからである。家庭の健全化を目的とした指導を、布教方針としている。従い、教団の資料を見ても、倫理的であり、常識的である。

然乍ら、本山に祈禱の為の建物があり、祈禱会を行なっていることを考えれば、念法真教の考え方は別として、一般信者の祈禱・護摩供養に対する期待については、指導のとおりであるか、否か、疑問の残るところである。

祈禱と布教の関係について考えてみると、比較的教義の似ている浄土真宗では、一切祈禱をしていない。ここに物足らなさを感じている真宗信者は、教義的抵抗感なく念法真教の門を叩くかと思われる。その為か、浄土真宗から入信する人が多いことを述べておられた。

## 2 行事

伝統的仏教行事（彼岸・盆施餓鬼・花祭りなど）

初代灯主にちなむもの（生誕会・命日忌・立教開宗など）

祈禱会（護摩）・月例祭・春の大祭・御詠歌大会

各種研修会（社会学級など）・法座（説教・悩みごと公開相談）

## 八、信徒の義務

念法真言の受持信唱・「五聖訓」の遵守以外は、特にないそうである。

## 九、信徒の入信しての感想

直接、取材ができなかった。

## 一〇、他宗への感想

「去るものは追わず、来るものは拒まず」が方針だそうである。日蓮宗からの信者は、究めて少ないそうである。また、葬儀は菩提寺に任せ、法事は希望があれば、受け付けるようである。

○今回の調査では、質問に答えて頂いた長谷川氏が、「念法真教は、教義・組織など色々な方面が、整備されていないので、これからです」と何度か述べておられた。更に、各種資料の出版も少なく、予備知識も不十分であった為、今一つ捉えきれなかったのが実感であるが、以下、感じた点を挙げておく。①他宗に対して批判的ではない。②教団の維持・拡大は、教主の魅力から、組織の機能・教義に移行するように思われた。③信仰のみならず、社会に目を向けている。④人生相談に力を入れている。

\*調査スタッフ 赤堀正明主任、木村康之所員、山口裕光・植田観樹・渋沢光紀・西片元證研究員

\*執筆担当者 西片元證研究員

### 註1 「五聖訓」

- 1、神仏祖先を敬い、ねたみ、たかぶり、むさぼり、両舌の心を起こさず家内和合円満に暮し、我が家の不足を一切他人にもらさぬこと。
- 2、朝はやく起き出て今日一日の勤めを真に行ない生かされる喜びに御恩を報じ何事にも感謝を忘れざること。
- 3、人の美点をあげて喜び合ひ、悪口を言わず相互に無駄を省き良く勤め共に楽しき社会を作ること。

4、神仏祖先に御恩を報ずるため、世の迷える人々に神仏祖先の有難きことを知らしめ、安樂界に導き徳を積み人生の使命を全うすること。

5、正法を守り国恩に報ゆること。

註2 「九誓願」

- 1、我等の身命は是れ露の如く幻の如くと観じ、速かに菩提心を発せんことを願うべし。
- 2、たとえ我が身は滅ぶとも我等の心性は不滅なることを悟り、早く生死の苦界を離るべし。
- 3、常に五聖訓の心を養い、如何なる順逆の境にあるも心顛倒せざるべし。
- 4、自ら神仏の代身なりと確信し、己を慎みよく世界の闇を破して光明を与うべし。
- 5、たとえ我を苦しめ我を罵る者あるも、皆これ神仏の慈悲なりと喜び深く感謝して非を改むべし。
- 6、一滴一滴の雨水のよく石を穿つことを知りて、我等常に撓むことなく大悲願達成に努むべし。
- 7、忍耐はこれ百行の基なり、寒に耐えるの梅、花まさに芳しと悟り、ねたみ、たかぶり、むさぼり、両舌の心を押え怒を面に表わせざるべし。
- 8、一言一行もこれみな因果の種となることを悟り、不誠の言動を固く慎むべし。
- 9、神仏はこれ我等が真実の父母なり、たとえ独り寂寥の立つとも合掌瞑目して念法を唱うれば、直ちに神仏目前に現われ給う。故に神仏と共なるを信じ、感謝の心もちて日々の正業に励むべし。